

二種の涅槃界について

林 五 邦

此は教授が近き將來に於て「解脱と道跡」と言ふ題で大谷大學の特殊講義として講述しようと思つて居られた草稿の一部分であつて、其を病の床に就かれてから早急に纏められたものである。従つて完全なものではないとの事であつたが、兎に角教授の絶筆となつてしまつた。(編輯子)

—

解脱涅槃の理想はこれを身に體現し、實證すべきものであつて、これを固定化し、概念化すべきものではなく、従つてその心境は如何なるものであるかといふことも、佛陀並に佛弟子の生活自體の上に具象化せられたものであるから、これまた説明すべからざるものであるが、その究竟の理想の心境に到達した聖者にあつては、自がじゝに現實に隨順して、敢て生を希はず、死を怖れざるの心境に住して、寂靜清涼の生活を營むことからして、その死後の生活、死後の世界如何といふが如きことは、何等問題とならざるも、一般の人々にあつては、自分達の死後如何の問題と、もに、又かゝる聖弟子の死後の生活は如何なるものなるや、かゝる聖弟子は死後斷滅して何等の存在のなきものなるや、即ち涅槃は全く虚無なるものなりや、又かゝる聖弟子は不死の状態に到達せしものなるやと、その死後如何といふことについての關心と疑惑を抱いたことは、阿含・尼柯耶中所々に出で、以て佛陀及び佛弟子に對して、屢々か、

る疑問を提示したところである。^①

然るに佛陀はかゝる疑問の提示に對しては、「これらは自らの利益にならず、梵行の基本ともならず、厭離のためにも、離貪のためにもならぬから、このことを説明しないのである」と宣ひ、捨置記(*thapaniya*)として、或は無記(*avyākata*)として、これに對する解答を與へられなかつたことから、或時は阿那律、異學の徒に如來の死後如何と問はれて、無記と答へるや、異學の徒に罵られ、又舍利弗が耆闍崛山に於て、同じく外道にこの問題を訊かれて、無記なりとして斥くるや、外道怒つて「かゝるものが耆答摩の上足の弟子なりや、愚にして痴、辯舌なく赤兒の如し」と罵り去りし如きこともあつて、當時の人々が如何にこの問題に關心をもつたものかを物語るものであるが、かゝる疑問の提示は單なる戲論にのみとゞまるものでもなく、幾分當時の人々の宗教的要求にも基くものであるから、佛陀は那邊の消息を顧慮し給うてか、この問題に觸れて、經典中に涅槃を有餘依(*sauvādisesa*)と無餘依(*anupādisesa*)との二種に分ち給ふたものは、これらの疑問の提示に對する佛陀のある種の解答と見ることが出来るのである。然してかゝる意味での涅槃を有餘無餘の二種に分つことは、既に *Upanisad* に出づるところで、*Muktika* up. II の序品に、「人の能作性、享樂性、苦、樂その他の諸相はこれ心法なり。煩惱の色想より繫縛あり。その滅は即ち有身(有命)解脱(*īvaṇ mukti*)なり。 *Uppādi*(依身)の解脱せし時は瓶中の虚空なるが如く相遍滿し、經營の終滅に至りて無身(無命)解脱(*ajīvaṇ mukti*)を得」とは、所謂經說の有餘涅槃に該當するものであつて、同二・七六に「有身解脱を離れて自己の現身が死に迎へられし時、彼は無身解脱に入る、恰も風の無吹動の相に入るが如し」といふものは、無餘涅槃に該當するものであつて、有身解脱を以て現實生身に於ける解脱とし、無身解脱を以て聖者の死後の世界とするものやうである。

阿含尼柯耶中に二種の涅槃の出づるを、*阿含*は A. IV. 118 (vol. III. p. 120) A. VIII. 19 (vol. IV. p. 202) A. VIII. 70 (vol. IV. p. 313) (以上無餘涅槃)・*Suttanipata* 354 (p. 62) (有餘)・*Itivuttaka* 44 (p. 38) 增一六・二(六二・五七九)同三九・三(六二・七三〇)中九(六一・四三〇)中六(一一・四二七)、本事經三・一八(六・二七・六七七)にして、今二種涅槃を並びあぐる *Itivuttaka* 44 (p. 38) に、

「比丘等よ、こゝに二涅槃界がある。二とは何ぞや。有餘依涅槃界と無餘依涅槃界とである。有餘依涅槃界とは何ぞや。比丘等よ、比丘等が阿羅漢となり、漏盡者となり、淨行を成就し、なすべき事をなし終り、重荷を下ろし、自分の目的をなし遂げ、有の結を滅し盡し、正智によつて解脱する。されど五根残り存し、快不快を享け、苦樂を経験し、貪瞋痴滅す。比丘等よ、これが有餘依涅槃界といはるゝのである。比丘等よ、無餘依涅槃界とは何ぞや。比丘等よ、こゝに比丘あつて阿羅漢となり、漏盡者となり、淨行を成就し、なすべきことをなし終り、重荷を下ろし、自分の目的をなし遂げ、有の結を滅し盡し、正智によつて解脱する。比丘等よ、こゝに全ての受を享け樂しまず、清涼となるであらう。比丘等よ、これが無餘依涅槃界といはるゝのである」といひ、これに該當する本事經三(六一・七・六七七頁)に、

「其涅槃界、略有二種。云何爲二。一者有餘依涅槃界。二者無餘依涅槃界。云何名爲有餘依涅槃界。謂諸苾芻得阿羅漢。諸漏已盡、梵行已立所作已辦已捨重擔已證自義已盡有結已正解了心善解脫、已得遍知宿行爲緣所

感諸根、猶相續任、雖成諸根、現觸種種、好醜境界、而能厭捨、無所執着、不下爲愛志、纏繞其心、愛志等結皆永斷故……雖復有意及好醜法、而無貪欲、亦無瞋害。所以者何。愛志等結皆永斷故、乃至其身相續住、世未繫涅槃、常爲天人瞻仰禮拜恭敬供養、是名有餘涅槃界。

云何名爲無餘依涅槃界。謂諸心必得阿羅漢……已得遍知。彼於今時、一切所受無引因故、不復希望、皆永盡滅。畢竟寂靜究竟清涼、沒不現、惟由清淨、無戲論體。如是清淨無戲論體、不可謂有、不可謂無、不可謂謂彼亦有亦無、不可謂謂彼非有非無、惟可說爲不可施、設究竟涅槃、是名無餘涅槃界……

漏盡心解脫 任持最後身、名有餘涅槃、諸行猶相續 諸所受皆滅 寂靜永清涼 名無餘涅槃 衆戲論皆息 此涅槃界 最上無等倫 謂現法當來「寂靜常安樂」

といふもの亦この意を補ふものであるが、これによれば有餘涅槃 (sopādisesanibhāna; Skt. sa-upadhiśesanirvāna) とは依身 (upādhi) ある涅槃 (sa-upadhi-sesa 依身の残りある) 即ち煩惱を斷盡して、現身に於て涅槃の理想を證得し、聖者となるも、尙宿業による五蘊假和合の依身が存し、従つて五根によつて快不快を感じ、苦樂を経験するも、これに取著することなく、よくこれを厭捨して煩惱のため、にその心を纏縛せられることのない、現在世に於ける涅槃の境地、阿羅漢の證得をいふものであつて、無餘涅槃 (anupādisesanibhāna; Skt. nirupadhiśesanirvāna) とは依身なき涅槃の義にして、更に前者に一步を進めて五根によつて快不快を感ずることなく、寂靜清涼にして戲論を離れ、有無の境を離れた究竟涅槃、即ち涅槃の最後の状態をいひ、S. XXXVI, 5 (IV. 208) に「彼は正しく受を知る、受を知りて現法に於て無漏、身壞命終するや法に住して聖者は有爲に入らず」といふが如く、聖者の命終の時を以て完全にこの境に入る

ものとせられるのである。

されど上の所引の *Uvuttaka* の經文の上には「すべての受を樂しまず、清涼となるであらう」といふのみで、その無餘涅槃の意味は稍不明瞭であるが、長行につゞく偈頌には、「かくの如き執着なき有眼の人によりて、これらの二の涅槃界は説かれたり、一界はこゝに現法のもの (*diḥhadhammika*)、有を引くものは滅すれど、依身の残りあり (*saupāyaśeṣa*)。無餘依はまた未來のもの (*amparāvika*)、一切の有は滅したり。無爲の足を知り心解脱し、有を引くものを滅せし彼等は、法の精要に達し、滅に於て樂しみ、かくの如く一切の有を棄てたり」といひ、無餘涅槃を説明するに、*amparāvika* 即ち「未來のもの」の語を用ひ、「其には一切の有が滅して」*ṇe* (*yaṃhi nirujjanti bhavāni sabbaso*) といひ、*upādi* の註によれば “*cañhi upādānehi upādiyanti upādi paṭcakkhandhanassa adhvacanāni*” (四取ごとく) 取らるゝもの五蘊の名なり) といひ、之に該當する本事經の頌に、「漏盡心解脱 住持最後身一名有餘涅槃 諸行猶相續 諸行受皆滅 寂靜永清涼 名無餘涅槃 衆戲論皆息 此涅槃界 最上無等倫 謂現法當來 寂靜常安樂」とあるによれば、明に有餘依涅槃は現在世に於て到達した涅槃の境地、無餘依涅槃は五蘊の滅即ち依身の滅した後の涅槃即ち一切の存在の有を離れた涅槃の境地であつて、明に死後に到達する未來のものとするのであり、又 S. XXXVI, 5 (IV. 207) に「樂にも苦を見、苦を刺と見、不苦不樂の寂靜にも無常をみるもの、かくの如き比丘は正しく受を知る。彼れ受を知りて現法に無漏となり、身壞して法に住し (*dhammaṃ ho*) 智者 (*vedagā*) は數に入らず」といふのは、受を知りて現在に於て無漏になり、死後に於て法に住して生死に入らず無餘涅槃に入るものといふべく、*Udāna* VIII, 5 (p. 85) の佛陀純陀の食を食されて病を得給ふや純陀の悔ひを慮り給うて、成道前と入涅槃前との如來への供養には大果ある

ことを示される文の註(p. 405)に、「世尊は Sujāta の與へし食を食して有餘涅槃界に般涅槃し、Cunda の與へしを食して無餘涅槃界に般涅槃し給ふた」とあるによれば、これ又佛陀の成道即ち現身證得の涅槃を以て有餘涅槃とし、沙羅双樹下の入涅槃を以て無餘涅槃とするものである。

又 A. IV, p. 77 (漢になし)に、嘗て比丘たりし Tissa 梵天が目連に「俱解脱、慧解脱の比丘は諸天はかく知る。

この尊者俱解脱、慧解脱のものは身體の存続する間は、人天は彼を見得るも、身壞せば人天は彼を見ない。友なる目連よ、かくして彼等諸天にかゝる智慧が生ずるのである。『無餘のもの』といひ、「身證、見至、信解脱、隨法行のものは……現法に於て知り實證して入つて住するであらう。目連よ、彼等諸天にかゝる智が生ずる『有餘のもの』といふに見れば俱解脱、慧解脱の聖者の身壞命終を以て無餘涅槃とするものといふべきである。

然してこれを後の阿毘曇教學の上に見るに、婆沙論三二(大二七・二六七―八)には二種の涅槃に關する阿毘達磨の諸論師の異解をあけ、更に發智論二(大二六・九二三)を受けて二種涅槃を説明して、

云何有餘依涅槃界。答若阿羅漢、諸漏永盡、壽命猶存、大種造色、相續未斷、依五根身、心相續轉。有餘依故、諸結永盡、得獲解證、名有餘依涅槃界。……云何無餘依涅槃界。答即阿羅漢、諸漏永盡、壽命已滅、大種造色、相續已斷、依五根身、心不復轉。無餘依故、諸結永盡、名無餘依涅槃界。^⑥

といふもの、又犢子部の所傳といはるゝ舍利弗阿毘曇論七(大二八・五七〇)に經説を引用して、

云何有餘涅槃。謂此比丘阿羅漢、諸漏盡、所作竟、捨於重擔、逮得已利、是盡有煩惱、正知得解、諸陰界入、以宿業緣住故、以心受諸苦樂、有適意不適意、是名有餘涅槃界。云何無餘涅槃界。謂比丘五陰滅、未來五陰不

復續生^二。是名^二無餘涅槃界^⑦。

といふもの即ち有餘涅槃を以て現在の證得とし、無餘涅槃を以て阿羅漢の般涅槃時の證得とするものにして、よくこれを受くるものといふべく、有餘無餘を以て現在世に於て得る涅槃と、死後未來に於けるものの有餘依の延長を以て無餘依とするの二種に分つものといふべきである。

三

然らばその現在證得の涅槃の完成、その延長ともいふべき無餘涅槃とは如何なる内容のものなりやは、これを知り難く、又これに關しては佛陀の經說の上には唯、「慧者俱得^レ義、爲^レ現法得樂、亦爲^レ後世安^⑧」といひ、或は「現法得^二安穩^一、現法喜樂住、後世喜樂住^⑨」といひ、或は本事經一(大・七・六六四)に「諸有多聞人、能捨^二食財位^一、勤修不^二放逸^一、證^二常樂涅槃^一。智人無^二放逸^一、能攝^レ持^二二利^一。謂現法當來、俱令^レ至^二圓滿^一、諸有善能成。現後俱利樂。前後衆賢聖、皆稱爲^二智人^⑩。」とあつて、現法に安穩なると共に當來も亦安穩なることをいふのみにして、何等積極的にその内容の説示を見ないのである。然らば何が故にその積極的説示を見ないかといふに、次の理由に基いてゐるのである。即ち無餘涅槃は大涅槃の理想の境であつて、聖者の死によつて初めて體達せられるものであること、未だ現身に於て到達しない境地、従つてそは體驗を待つべきものであること、現實の人生に安住するものにあつては死後の涅槃の延長は全く問題にならないこと、又雜阿含三二・一(大・二・二二六、S. XVI, 12. vol. II, p. 222)に「舍利弗は迦葉に佛陀は何故に如來の死後の有無について説示し給はないのかと問ふや、死後の有無を論ずるのは、何等梵行のためにも、涅槃に導く

二種の涅槃界について(林)

ものともならないことをいひ「如來者愛已盡、心善解脫、甚深廣大、無量無數、寂滅涅槃。舍利弗如是因、如是緣故、……不可記說」とあるやうに、無餘涅槃は甚深廣大の寂滅の境地であるからして、論義を絶するものであること、従つて佛陀は恒に戲論のための戲論を斥けて、ひたすら實踐の道に入らしめ給うたものであること、一般に正統婆羅門派にあつては梵天に上生するのを常住にして不動、不老不死の涅槃の境とし、これを物質的に説明したの^⑩に對して、佛陀は三界を以て生死輪廻の境とし、梵天をもそれに包含せしめられたのと、従つてその涅槃の境を説示するに當つても、否定的消極的説示を以てせられたから、教説の上にその積極的説示を見ないのであらう。S. II, 3, 6 (I. p. 61) 雜阿含四九・一四(大二・三五九)、別譯雜阿含一五・九(大二・四七七)に、佛陀が赤馬天子 (Lohiassa) を誡められて、「生ることなく、老ゆることなく、死することなく、衰ふることなく、生れ更ることなき、かゝる世界の終邊は、歩行によつては知ること、見ることも、達することも能はず。」と宣ひ、又涅槃に關して「そこには大地も水も火も風も空無邊處も識無邊處も無所有處も非想非々想處もあることなく、此世も彼世も日月もなし。比丘等よ、これを往ともいふべからず、來とも止とも去ともいふべからず。死とも生ともいふべからず、堅住にあらず、生起にあらず、停止にあらず、これ則ち苦の終邊なり」と宣ひ、又 S. I, 3, 7 (I. p. 15) 雜阿含二二・二六(大二・一六〇)に「そこには水も大地も火も風もとまらず、そこよりは流れも流れず、事も起らず、そこには名と色とは残りなく滅す」といふもの、又 Udāna I, 10 (p. 9) に於て Bahya Dārucriya の般涅槃を知り給ひて「そこには水も地も風もとまらず、星も輝かず、日も照らず、月も光なく、闇もなきところ、牟尼婆羅門は聖智によりて自らこの境を知り、色無色苦樂を離脱す」と宣ふのによつて、これを知ることが出来るのであるが、かゝる否定的消極的表現は、その内容の虛無を意

味するものではなく、否定することによつて、その存在の概念を批越するものであることを現すものである。されば S. XXII, 85 (III, p. 109 f.) に「焰摩迦比丘が漏盡者は命終と共に滅に歸し、消失して死後何ものも存することがないとの、無餘涅槃を以て虚無と解するが如きに對して、佛陀は異端として彼を斥けられ、舍利弗は更にこれを誠しめて、色受想行識の五蘊は如來でないと共に、五蘊を離れて如來のないことを示し、己れの無知による邪見としてこれを棄てた」といひ、(Iiv. 43 (p. 37) Udana VIII, 3 (p. 80) に「比丘等よ、無生、無有、無作、無爲がある。比丘等よ、もし無生無有無作無爲なくば、こゝに生、有、作、有爲の出離が知られないであらう。比丘等よ、されば不生、無有、無作、無爲があるから、生、有、作、有爲の出離が知られるのであらう」といひ、生、有、作、爲を離れた實在の境地である事を示すもの、從つて雜阿含三八・一五(六二・二八〇) Udana VIII, 9 及び同 10 (p. 93) に「陀驪摩羅子(Dabba Mallaputta)が佛の面前に於て火定三昧に入り、虚空に坐するや、身より火焰を放ち、火焰その身を包み、又その間に水を放つて空中に廻轉し、かくて水火を收め、その後には恰も油盡きて灯火の熄みしが如く一塵をも残さないで入滅したが、佛陀は Dabba Mallaputta の入滅を嘆へられて「熱打せられし堅鐵も、燃ゆる火も、次第に消えては、その行衛の知られざるが如く、かく正解脱の人、欲縛の流れを渡り、不動の安樂に到りし人の行衛は知られざるなり」といひ、A. IV, p. 77 に慧解脱、俱解脱のものが身壞命終すれば人天もこれを見ることが出来ないといひ、Suttantapāṭi 1075, 1076 (p. 207) に佛陀は Uḍḍisava 青年に、暴風に吹かれし焰の滅して數に入らざるが如く、等しく名色身より解脱せし牟尼は滅して數に加はることなし」滅に赴きしものには度量(panūṭṭa)なし、よりにて以て彼なりと語るべきもの、彼にはこれなし。一切諸法の斷じ盡くされしとき、一切の論議道(vadīpattā)盡くされたり」といふやうに、人天と

雖も亦之を見ることが出来ない境であつて、M. 72 (J. p. 47) に如來の死後に於ける解脫心 (vimuttacitta) の有無に關する跋蹉 (Vaccha) の問に答へて「色乃至識によつて如來を知らんとするも、如來は已にその色乃至識をすてゝゐる。

此色乃至識を解脫した如來は深遠にして計るべからざること大海の如く、生るといふも、生れずといふも、生れて生れずといふも、生れず生れざるにあらずといふもあたらぬ」と宣ふやうに、無餘涅槃の内容は如何なるものであるかについては、これを指示し、推論し、概念化することの出来ない、四句百非を絶する不可說微妙の境、至高の實在とも稱すべきものであつて、佛弟子等はこの消極的否定の表現の上にこれを味得したものと云ふべきである。

然るに漢譯阿含にあつては、この二種の涅槃に關する又別種の解釋が存するのである。即ち漢譯增一阿含三九・三六二・七三〇に「何等人已至_二彼岸_一者。於是或有_二一人_一信根精進而懷_二慚愧_一、盡_二有漏_一、成_二無漏_一、於_二現法中_一而自娛樂。生死已盡、梵行已立、所作已辦、更不復受_二胎_一。如_レ實知_レ之、於_二此無餘涅槃界_一而般涅槃。是謂_二此人已渡_二彼岸_一者_レ也。」といひ、又中阿含七五淨不動經(六一・五四三)に、阿難が世尊に云何に行すれば般涅槃をすることが出来るかと問ひ、佛これに答へられて「比丘にして若し是くの如く行ぜば我なく、我所なく、我當にあらざるべく、我所當にあらざるべく、もし本有は即ち盡く捨つるを得ん。阿難もし比丘にして彼の捨を樂しまず、著せず、住せざれば……必ず般涅槃を得ん」と宣ふや、阿難は更に聖解脫を問ふに「世尊已說_二淨不動道_一。已……已說_二無餘涅槃_一。云何聖解脫耶」といひ、佛又聖解脫を説き了つて「我今爲_レ汝已……已說_二無餘涅槃_一……」とあるによると、一見何れも無餘涅槃を以て現在證得のものとするものゝやうである。今これを、これらに該當する巴利文に徴すると、增一に該當する巴利文にあつては「……彼は有漏を滅して無漏心解脫し、慧解脫し、現法に於て自ら知り實證して達して住す」^④

とのみ云ふて、漢譯にいふやうな「無餘涅槃界に於て般涅槃する」云々の語なく、又これと同種の漢譯中阿含四(大・四二五)水喻經にも「如_レ是知如_レ是見、欲漏心解脫、有漏無明漏心解脫、解脫已便知_レ解脫。生死已盡……不_レ更受_レ有知_レ如眞。」といふのみであつて、これ又無餘涅槃の語がなく、これが單譯の鹹水喻經(大・八一)にあつても無餘涅槃の語がないことに徴しても、又上の所引の中阿含七五淨不動經の巴利文に、「彼は捨を喜ばず執せずして立ち、識に對する取著なし、この取著なき比丘が般涅槃するのである(anupādāno, ānanda, bhikkhu parinibbayaṅgū)」とつて無餘涅槃(anupādisambhāna)の語がなく、「我れ流れを離るゝことを説きぬ」とあつて漢譯にいふやうな「無餘涅槃を説きぬ」の語のないことに徴しても、上の漢譯増一阿含及び中阿含の所引の文は明に Anupādānambhāna(無取著涅槃)を漢譯者が誤つて無餘涅槃としたものゝやうである。又増一阿含一六・二六二・五七九に「有_二此_一二法涅槃界。云何爲_二。一。有餘涅槃界、無餘涅槃界。彼如何名爲_二有餘涅槃界。於_レ是比丘滅_二五下分結_一、即彼般涅槃、不_レ還_二來_一此世。是謂名爲_二有餘涅槃界。彼如何名爲_二無餘涅槃界。如_レ是比丘、盡_二有漏_一成_二無漏_一、意解脫智慧解脫、自身作證而自遊戲。生死已盡、梵行已立、更不_レ受_レ有、如_レ實知_レ之。是謂爲_二無餘涅槃界。」といふもの、これによる時は四沙門果中の第三不還果即ち五下分結斷のものを以て有餘依涅槃とし、此世に於ける最高の涅槃、即ち阿羅漢果に到達するのを以て無餘依涅槃とするものゝやうである。しかしこれに該當する巴利文を缺いてゐるから今俄にこれに同することは出来ないが、Theragāthā 1274, 1275 (p. 114) Suttainipāṭa II, 12 (p. 62) によれば、佛陀の教團中の詩人鵬耆舍(Vaṅgisa)は、その教授師 Nigrodhakappa が般涅槃した時、師は般涅槃したかどうかを佛陀に尋ねた文中に「Kappayana は實義に契へる梵行を修したり。こは彼に空しかりしや。彼涅槃せしや。はた有餘依(sampādisa)なりしや。いかに解脫せ

しや。そを我等聞かん』と。世尊は(宣へり)、『彼はこゝに名色に對する渴愛を截てり』と。又五者の最上たる世尊は宣へり、『長衣に執着せし渴愛の流れなる生死を残りなく(assa)渡りぬ』¹⁰⁾といふのは如何といふに、經説の註(p. 30)によれば、無學としての無餘涅槃界であるか、はた有學としての有餘依であるかの疑問であつて、彼渴愛を絶つて生死を残りなく渡り、無餘依に於て般涅槃したとの佛陀の答へであるが、これに該當する雜四五・二四(大・三三三)には「彼尊者尼拘律想、以_二疾病_一故遂般涅槃。時尊者婆耆舍作_二是念_一、我和上爲_二有餘涅槃無餘涅槃_一。」とあるから見れば、即ち師は生前已に完全なる無餘涅槃に達してゐたか、又は無餘ならぬ有餘涅槃であつたかを問ふたものであつて、これを上の所引の増一阿含一六・二の文に對照すれば、無餘依はいふ迄もなく阿羅漢果、有餘依は不還果を意味するものとなるのである。更にIkivuttaka 45 (p. 39)に、遠離を樂しみ寂靜に住し定まり退かず、空閑處に止住するものは二種の果報を得る事を示して「現法に於ては(全)智(antā)もし取の残りあらば不還性(anagāmitā)である」といひ、又 Iti. 46 (p. 40); 同 47 (p. 41); M. 10 (vol. I, p. 62); D. 22 (II, p. 314); M. 71 (I, p. 48); S. VII, 57, 2 (V, p. 120); S. V. p. 181; 同 V. p. 285; A. V. 47 (III, p. 82); A. V. 122 (III, p. 143); Suttantapāṭi III, 12 (p. 140) によつて、れれれと同じく、雜二七(大・二九六)に「當得_二種果_一。現法得_二漏盡無餘涅槃_一。或得_二阿那含果_一。」と云ひ、M. 10 に該當する中阿含九八念處經(大・五八四)には「二果を」或現法得_二究竟智_一、或有餘得_二阿那含_一。」とあつて、「巴利文の antā に該當するものを、究竟智と譯し、M. 10 の註 (I, p. 301) Suttantapāṭi の註 (p. 504) は、「智(antā)を「阿羅漢(arahattam)」と云ひ、「界の残りあれば (sati vā upādisese)」を註して「取の残り」に於て完全に滅しつゝなごなごは (upādānasose vā sati aparikkhime)」とし、「不還性(anagāmitā)」を註して「anagāmi bhāvo」云々を云つて、明に現法に於ける智とは究竟智、

完全智であつて、阿羅漢果であり、従つて無餘依涅槃を以て阿羅漢果の得達とし、有餘依涅槃を以て不還果とするもの、やうである。然し上の所引の *Hev.* に該當する本事經四・二(大・一七・六七八―九)には、之に反して「如是必芻於三二果中、我説定能隨證一果、謂於現法、或證有餘依涅槃界、或不還果」といひ、又雜二七(大・二・一九七上)に七菩提分の修習の二果をあけて「得現法智有餘涅槃、及阿那含果」といひ、同一雜阿含の中にも一は漏盡無餘涅槃とし、一は現法智有餘涅槃として異り、*Hev.* に該當する本事經四・一〇(大・一七・六八一)の偈には「生勝定上慧、盡生老死邊、證有餘依界」と重説し、更に *Itiv.* に該當する本事經四・一(大・一七・六七八)の偈には「得一果、無疑、或斷下分結、證得不還果、或斷上分結、度生老病死。」といふによれば、全く之と異なるものであつて、即ち有餘依涅槃と不還果とを全く別種のものとし、有餘依涅槃を以て生老死の邊を度する阿羅漢果とするものである。更に *Dh. A. IV. (p. 108)* によれば *Dh. v. 369* の「食欲と瞋志とを斷ちて、それより汝は涅槃に行くべし」といふのを佛音は註して「汝貪瞋の結を斷じ、これらを斷じて阿羅漢に到達し、それよりその後 (*tato aparabhāge*) 汝は無餘依涅槃にゆかん (*gamissasi*)」といふによれば、阿羅漢果を以て有餘涅槃とし、無餘涅槃を以て、それ以後に達するものとするのであり、又 *Dh. II. (p. 163)* 及 *Dh. v. 89* の「煩惱を盡くして光を放つ人こそ、この世に涅槃を得たる人なれ」といふを註して、阿羅漢に到達するを以て有餘涅槃とし、最後の心の滅によつて蘊を捨つるを無餘涅槃とするといふのによれば、これ明に無餘涅槃を以て聖者の死を意味するものであり、又 *A. VII. 53 (IV, p. 77)* によるも(漢になし)阿羅漢を以て有餘依涅槃とするものであつて、上の所引と全く異なるものである。又經典中所々に、「如來が無上の正覺を開かれし夜より、無餘涅槃界に般涅槃し給ふ夜までのその間……」⁽²¹⁾ といふが如き、又増一阿含二八・四(大・二・六五二)に優陀延比丘、無餘涅槃

二種の涅槃界について(林)

界に於て般涅槃するや、世尊は彼の髑髏を取り來つて梵志に示さるゝことに徴しても、又經典中所々に「無餘涅槃界に於て般涅槃す」といふが如き、²²⁾ 又良家の子の信仰よりしての四處巡禮の文中に「如來はこゝに無餘涅槃界に於て般涅槃し給うた」といふが如き、²³⁾ 又如來が無餘涅槃界に於て般涅槃し給うた時の大地の震動を第八の震動とするが如き、²⁴⁾ 又 A. VIII, 19 (vol. IV, p. 202) に法と律との八不思議をあける中に「Pahārāda yo, かの世界に於ける如何なる流れも大海に注ぎ、如何なる雨も大海に落ちても、それによつて大海に増減がない。それと同じやうに Pahārāda yo, もし多くの比丘等が無餘涅槃界に般涅槃するとしても、それによつて涅槃界には増減はない」といふが如き、S. IV, 33 (vol. I, p. 122) に、Godhika の自殺した時、その遺骸の周圍に居た比丘等に煙雲のなびくのを示し給つて「これ Mara なり。彼良家の子 Godhika の讖を求むるも Godhika の讖は何處にもなく、Godhika は般涅槃せり」といふを註 (p. 184) に、「般涅槃とは無餘涅槃を以て般涅槃せり」といふ。又 Udāna VIII, 9 (p. 92) に、Dabba Mallaputta が火定三昧に入つて入涅槃したが、その註 (p. 431) に、parinibbānakāla ṇa anupādisesa nibbānadhāruṇā parinibbāna kālo ṇa であるのに徴しても、聖者の死を以て無餘涅槃とするものゝやうである。これ等に徴する時は阿羅漢の到達を以て無餘涅槃とすべきものではなく、聖者の入涅槃を以て無餘と解するもの、従つて有餘涅槃は現法に於いての阿羅漢の得達、無餘涅槃はその有餘の延長、聖者の死後の世界と解せられ、有餘涅槃を以て不壞果とするが如きは、全くこれと異なる解釋と見らるゝものである。

これによつてこれを見れば、有餘無餘の二種の涅槃に就いては巴漢の資料の間に全く別種の解釋が存するのであるが、元來涅槃とは佛陀はこれを菩提樹下に於て體得し、その解脱の心境を述べて「吾心解脱は不動なり。こは最後の生なり。今や再有なし」と宣ひ、*Malavagga* (U. p. 14, 14)によれば、この得達の表現は佛陀の成道時ばかりでなく、五比丘の得達、耶舎を初め、その他の佛弟子の解脱時にも、かゝる表現を見るから、明に一切の漏の滅盡なる涅槃は現在に於てこれを體得するものであつて、佛陀は自らこれを體得されるときに、僧伽をして、ひたすらに、この理想の實現に導かんとせられたものである。従つて佛陀の説法の初めにあつては、後に教説中に現はるゝやうに涅槃の上には有餘無餘といふやうな二種の別もなかつたものやうである。その有餘無餘を以て現在に於ける證得と聖者の死による涅槃の延長と解するものは、*sa-upādisesa*, *an-upādisesa* の *upādi* を “substratum of being” 即ち蘊 (*khandha*) の義に解し、*sa-upādisesa* を依身即ち肉體の残りあるもの、*an-upādisesa* をその否定、即ち依身の残りのないものとしたものであるが、元來 *upādi* は *upa + ta + dā* から轉じたものであつて、*upa + ta + a* との二種の接頭音を有する *pa + ta + a* が *ki* 語基構成法に依つて最後の *pa* を省略して *i* を附して *upādi* となつた名詞であつて、*upa + ta + dā + na* を附して成れる *upādāna* と同一の意味を有するものである。されば *upādāna* は “drawing upon” “grasping” “holding on”, “grip” “attachment” 即ち取、取着と譯せられるものであつて、*upādāna khandha* (取蘊) の取と同じく欲取、見取、戒禁取、我語取の四取を含み、取は煩惱の意であつて、従つて *M. 11* (U. p. 65) に “*anupādānassa āvuso sā niñhā, na sā niñhā sa-upādānassa*” 「友よ取着なき人に終局あり、取着ある人に終局なし」といひ、又 *M. 106* (U. p. 265) に “*saupādāno, Ananda, bhikkhu na parinibbāyati*” 「阿難よ、取着ある比丘は般涅槃せず」といふ阿含尼柯耶中の用語例の上に見

二種の涅槃界によつて(林)

ても依身の意味を含みず、*upādi* も亦煩惱を意味して、直接的には依身の意味を含まないのであるが、後に何等かの變化をなして *upādi* が *upādhi* の意となり、*śeṣa* と結合した場合に *having some fuel of life (khandha or substratum)* left, 即ち still dependent (on existence), not free, materially determined 依身則ち肉體の残りの意味と解せられるに至つたものと見らる。 *upādhi* のものも阿含尼柯耶中の用語例を見らる。 *M. 22* (U. p. 136) の “*sabbupādhipaṭi-saḅbgaṭṭya*” (一切の取着を捨つた後) の如し。 *Sn. 992* の “*upādhisankhaye*” (取着の滅に於つ) の如し。又 *M. 66* (U. 453); *Theri 318* (p. 154) の “*nirupādhihamma*” (取着なき法) の如し。 “*upādhi dukkhassa mūlan ti viḍitvā*” (取着を苦の本と知りし)。 *Sn. 1050* に “*upādhiṇidāna*” (取着に於つ) となす如し。又 *S. I. p. 6* に “*upādhihi natassa nandanā*” (取着に於つ) 人の喜びあり) の *upādhi* を註し (U. p. 31) 「*upādhi* とは四取なり」 何れも取の意味に解せられるものがあるが、尼柯耶の註には *upādhi* に纏 (*khandha*)、煩惱 (*kilesa*)、なまじり (*abhisankhāra*)、五欲 (*pañca kāmagunā*) ともあるから、 “*upādhisu jānā gacchitā*” (S. I. p. 186) 人々は依身に着ち、*upādhi*、註に “*khandha kilesāsankhāresu*” (U. p. 270) となつて *upādhi* に纏の義をも含むに至り、思想の變化として混同され *upādi* が *upādhi* に代用せられるに至つたものと見らる。 *Suttantapīṭaka* 1057 (p. 203) に “*Gotama* は優波提なまの *anupādhi*” 及び説を給ふ *anupādhi*” (U. p. 591) “*etha anupādhi*” *ti nibbāna*” となつて知られるのである。 *Itivuttaka* 並に本事經、尼柯耶の註のやうに、有餘を以て新舊譯家のいふ如くに、殊更に有餘身 (舊婆沙一七) 又は有餘依とし、依身の残りある涅槃、無餘を以て即ち依身の残りなき涅槃と解し、一を現在に於ける證得、他を死後未來に於ける證得とするやうな解釋は *upādāna* の意である *upādi* が

npadhiと混同せられ、その間に變遷を見た結果と見るべきである。又増一阿含並に Suttanipāṭa II, 12 のやうに有餘涅槃を以て四沙門果中の不還果とし、無餘涅槃を以て阿羅漢果の得達とすることも、元來涅槃といへば一切の漏の滅盡であつて、それは現在に於て證得するものであるから、その涅槃の上に漏の滅盡した涅槃(無餘涅槃)と、未だ煩惱の餘燼の存する涅槃(有餘涅槃)とを立つるが如きものも、既に涅槃の語義からして全くその意義をなさないものであるが、成道後の佛陀の諸方への遊行につれて、僧伽は次第に發展して佛陀を中心とする多くの佛弟子を見るに至り、従つてそれ等の佛弟子の間にあつても漏盡涅槃を以て、その究竟の目的とし、小罪にも恐れを見て精勤し、又まのあたり、これが體現者としての師主佛陀の生活にふれて、ひたすら、その證得を期して修行に専念しても、その實際の上には佛弟子の凡てが現在に於てこれを體得するのではなく、その根機の利鈍の如何によつては、修行しても現在に於て漏の一部を斷盡するのみであつて、一切の漏を滅盡することが出來ず、漏盡者でないものもあつて、こゝにその修行によつて到達する果報、即ち解脫の歷程の上に四双八輩といふやうな階次を生ずるに至つたものゝやうである。その預流、一來、不還といふも、いづれも死後利鈍に應じて涅槃の體得の上に遲速の別があるが、必ず未來に於て煩惱を斷じて涅槃を證得することよりして、こゝに又、無餘涅槃に死の意を含ましむるに至つたものである。然してその階次も、その初めは *Ivuttaka* 96 (p. 95) にいふやうな欲輓、有輓に結びつくもの、所謂生死に輪廻する凡夫と、欲を棄てても未だ全く漏の滅盡に入らず、有輓に結ばれて、たゞ此世に還來しないもの、所謂不還と、生死輪廻を絶ち、後有を毀ち、漏の滅盡に入つたもの、所謂此世に於て彼岸に到達したものと、三種の人に分類したものが、次第に發展して、涅槃の考察の上にも有餘涅槃、無餘涅槃の別を生じ、完全に涅槃に到達したものを、涅槃に近き心境に到達した

ものの別を生じ、更に三界説の思想と結合して、現在に於て未だ煩惱の餘燼を存し、不完全なる涅槃の心境にあるものも、死後天界に生れ、天界に於て、或は人天を往來することなどによつて、その間に殘餘の煩惱を斷盡して、次第に完成せられて遂に完全なる涅槃に入ると考へられるに至り、その涅槃への到達の遲速によつて四向四果の沙門果が考へられ、更にこの四双八輩の一々に諸種の分類を生ずるに至つたものである。

註 ① D. I. (vol. I, p. 27); D. 29 (vol. III, p. 136); M. 63 (vol. I, p. 426); S. XVI, 2 (vol. II, p. 222); S. XLIV, 1. (vol. IV, p. 374)

② M. 63 (vol. I, p. 431)

③ S. XXII, 86 (vol. III, p. 116 雜五・四、大ニ・三二頁下)

④ S. XVI, 12 (vol. II, p. 222 雜三二・一、大ニ・二二六)

⑤ A. IV, p. 74; M. I, p. 148; S. IV, p. 48; S. V, p. 29 には anupādāparinibbāna とあり、本事經には有餘依、無餘依と云ふ。

⑥ 舊譯毘婆沙論一七(大ニ八・二二八)略同。

⑦ 八韃度論二(大ニ六・七七)には「云何有餘泥洹界。答曰。若無著壽住活四大未没。彼造色五根與心周旋。是謂有餘泥洹界。於是有餘泥洹界。有結使滅盡。得不到彼岸。而取果證。云何無餘泥洹界。答曰。無著餘久過去般泥洹四大滅盡。彼造色五根無心可廻旋。是謂無餘泥洹界。於無餘泥洹界。諸使結盡。是謂無餘泥洹界。」とあり。

⑧ 中一一九說處經(大ニ・六〇九)。

⑨ 雜四・四、大ニ・二三。

⑩ Itv. 23, p. 16-7.

⑪ S. VI, 1. 5. vol. I, p. 145 雜四四・一九、別雜六・三。

- ⑫ Uddāna VIII, 1, p. 80.
- ⑬ 譬如燒鐵丸、其焰洞熾然、熱勢漸息滅、莫知其所歸。如是等解脫、渡煩惱淤泥、諸流水已斷、莫知其所之。逮得不動跡、入無餘涅槃。(雜三八・一五、大二・二八〇)
- ⑭ A. VII, 15 vol. IV, p. 13.
- ⑮ M. 106 II, p. 265.
- ⑯ V. 354-355.
- ⑰ kiñ anupādisesāya nibbānahāṭṭhā yathā asekhā, udāhu saupādisesāya yathā sekhāti puochati.
- ⑱ S. V, p. 236 には全智 (arhā) あり。
- ⑲ arahattapattito paṭṭhāya kilesa-vattassa khepiatā saupādisesena carima-citta-nirodhena khandha vattassa khepiatā anupādisesena cāti dvāhi hi parinibbānehi parinibbutā.
- ⑳ 中六六、説本經(大・五〇九)の阿那律の頌に「我不樂於死、亦不願於生。隨時住、所適、建立正念智、隨耶離竹林。我命在彼盡。當在竹林下、無餘般涅槃。」と。これと同頌の (Therag, 919 (p. 84)) には「竹林の下に於て無漏にして入滅せし」とあり、又異譯の古來世時經(大・八三〇)には「在於竹樹下、滅度而無漏。」とあれば、中六六の無餘涅槃は無餘にして般涅槃の意か。この無餘涅槃は anupādamaparinibbāna の意か。
- ㉑ D. 29 III, p. 135; Itiv. 112 p. 121; 中 137 (大二・六四五)
- ㉒ A. IV, p. 203; Uddāna VIII, 5 p. 85. 雜三五・一〇(大二・二五三)、雜四四・二〇(大二・四二三)、增三八・一一(大二・七二七)
- ㉓ D. 16 II, p. 141; A. IV, 118 II, 120.
- ㉔ A. VIII, LXX. vol. IV, p. 313; D. 16, II, p. 108.
- ㉕ M 註 I, p. 112; S 註 I, p. 175.